

大学生における TST を用いた自己概念理解についての一考察

A study of university students' self-conception: an investigation
of self-descriptions using TST

小野 美和
Miwa ONO

要約

対人コミュニケーションに関する研究を行う際に協力者の自己の特性、全体像、本人が重要だと考えている自己の諸側面などを捉えることは大きな意味を持つ。本稿では、その1つの方法として、TSTを用いて協力者の自己を捉える有用性について予備的な検討を行った。具体的には、大学生5名を協力者として、自己評価尺度の得点と関連づけながら分析を行った。その結果、TSTを用いることで、協力者自身がどのような側面に自己の評価や意味づけの判断基準を置いているかを詳細に捉えられる可能性があることが示唆された。

キーワード：大学生 TST 自己評価 自己概念

目次

I 問題

II 手続き

III 結果

- 1 個人が特に注目している自己の領域について（量的な側面からの検討）
- 2 その特性をもつことへの評価や態度について（質的な側面からの検討）

IV 考察

V 参考文献

I 問題

私たちは、常に自分の思うとおりに行動する存在ではない。人は、ひとたび他者との関係の中におかれると多かれ少なかれ他者の影響を被る存在としてある。さらに、他者が発する種々の情報を自ら能動的に探索し、それを積極的に自身の振舞いに活かそうとする存在でもある。そのような中で、他者に好意的に受け入れられつつ、同時に自分らしくあり続けるという行為がもつ意味は非常に大きいのではないだろうか。

このような側面に目を向ければ、他者に対して示す自己の姿は、多かれ少なかれ選択されたものである。正村（1995）が述べているように、従来のコミュニケーションモデルでは、呈示者が意図的にメッセージを表現しなければメッセージが受け手に伝達されることはない。逆に言えば、呈示者が伝達すべきメッセージを全て意図的に表現しなければならないということである。しかし、実際にはそのようなことをしなくてもメッセージは伝わっていることが多いし、表現したつもりでも伝わっていないこともある。それは、受け手が呈示者の行為を通してその内容を能動的に理解するからである。このような能動的なはたらきは理解の促進をもたらす反面、理解の不一致をも生み出す可能性を秘めている。これまでの研究が自己に焦点を当て、「何を表現したか・伝えたか」という定点的な扱いをしてきたのに対し、他者とのやりとりの中で考えるならば、「どう受け止められたか、受け止められたいか」という他者の存在を巻き込んだ双方向的な側面を検討する必要がある。

自分らしさというものを狭義の意味で、「自分のよさ」とするならば、自分がよいと感じている部分を相手に伝えようとするであろう。心理学では、このような行為を自己呈示（self-presentation）と呼んでいる。自己呈示の定義については様々なものが提案されているが、要約すれば「他者に対して、自分自身に関する情報をどのように・どの程度その相手に伝達するかという選択的な行為であり、他者からの承認を得ようとする行為」（久保、1998；福島、2003；他）、すなわち「他者に自分をよく見せようとする行為」と定義する

ことができる。この定義から、自己呈示には、(1) その行為には自己と他者が必要であるということ、(2) 呈示する内容は望ましい自己という選択的なものであるということ、(3) その望ましいものというのは他者からみてもよいものであるということ、(4) 結果の予測が含まれるということ、(5) 自分が呈示したものと相手から返される反応のズレや内容に注意を向けていなければならないこと、(6) 相手によって呈示内容や方法を変えらるということなど、多様な意味が含まれている。

自己呈示に関する先行研究を概観していくと、自己評価との関連が指摘されており、自己評価の高い人は自己高揚的・主張的な呈示をおこなう傾向が強く、逆に自己評価の低い人は自己防衛的な呈示を示す傾向があるという知見が得られている。しかし、このような知見は「自己」の視点から捉えた研究であり、先述したような「他者」を含みこんだ側面の検討が不足している。自己呈示とは誰かに向けて自己の選択された側面を呈示しその欲求を満たす行為である。そこには「他者」の存在が不可欠である。さらに日常生活の中では状況に応じて呈示を変化させていかななくてはならない。これまで述べてきたように、自己呈示が「自分を少しでも相手によくみせよう」という意図を含んだものであるならば、その呈示内容は「自分がよいと思うもの」である以上に「他者からみてよいと思われるもの」である必要がある。さらに言えば、Markus & Kitayama (1991) が、「相互依存的自己観が優勢である日本人にとっては、他者との関係の中で自己の有能性を主張するのではなく、他者と友好的な関係を築き、維持することが重要になる」と述べていることから、他者との関係を良好に保つことが何よりも重要視され、その上で自分のよさを示すということが大切になってくる。つまり、自分が所属する社会的文脈の中でより受け入れられやすい自己イメージを獲得し、主張していくということ、簡単に言えば、他者がよいと思うであろうものを選択し呈示する傾向があるということである。近年、「他者」の視点を取り入れた研究がさかんに行われるようになってきている。たとえば、福島 (1996) は、個人が複数の身近な他者に示している自己イメージは必ずしも同一でなく、それぞれの対人関係によって異なると述べている。また、自己呈示を行う呈示者が良い印象を得て悪い印象を避けようとするならば、それを観察した他者がどのように評価し反応するかは重要な問題であること、そして、その呈示が不適切であると判断された場合、その呈示者のイメージは否定的なものとされる傾向があることなどが報告されている。しかし、その呈示者と相手が親密である場合、不適切な自己呈示が直ちに評価や好意の低下にはつながらないという知見も出されている (池田、2001；他)。さらにこのような分野に関連して、親密な他者との間に結ぶ特定の対人関係が、自己の概念化や表出に与える影響についても研究が行われており、他者とのやりとりの中で自己を表現するという営みを包括的に捉えようとしている。人は、異なるつながりをもつ他者に対して、呈示することを望む自己イメージが異なることや、異なるタイプの聞き手が居る場合、その個々の人物に対して異な

る呈示をすることなども報告されている（福島、2003）。

このように、最近の研究によって他者の存在の重要性を指摘する知見は多い。そのような中で、厳密に考えた場合、呈示者と受け手が理解しあうイメージが完全に一致することはない。現実的には、両者の間で多少の不一致が生じていてもそれほどの問題とはならない。大まかな内容や評価が伝わりあえば、差し支えないからである。しかし、二人の間でその内容が多少なりとも一致していなければ、やりとりが成り立ちにくくなる。つまり、他者とのやりとりの中で呈示するイメージという点から考えると、その呈示した・する内容が相手にどのように理解されるか・されたかという結果を予測・モニタリングした上で呈示を行い、さらに必要があれば違う内容を呈示するというように繰り返されていくものである。そして、この過程では、他者を意識しながら呈示内容を選択しつつ、自分が呈示したものに対する自己内対話が行われているのである。言い換えれば、他者によってなされる評価やイメージといった意味の付与と、自身がその行為に対して与える意味、すなわち価値や評価といった位置づけが同時に生じるのである。さらに言うまでもないことだが、他者が好ましいと感じるものだけを示し続け、高い評価を得られていたとしても本人の中では十分な満足を得ることは出来ない。多くの選択肢の中から自分がよいと思うものを選び、それが相手にも好意的に受け入れられたとき、その行為は本人の自信になり価値のあるものになる。つまり、協力者自身がどのような側面に基準を置き、自身を評価するか、意味づけるかという部分を捉えることが重要になってくるのである。

繰り返しになるが、人と人とのやりとりにおける自己の問題、関係性などを考える場合、まず研究の出発点である個人、すなわち「協力者自身」を捉える必要がある。協力者自身が意識している自己の在り方の全体像を観察しておくことは非常に重要である。出発対象は科学的研究の基礎であり、その基礎が不明確では後の分析に大きな不安材料となるからである。そこで本稿では、協力者自身の全体像を捉える1つの方法として、Kuhn&Mcpartland (1954) が開発した TST (20 答法 ; Twenty Statements Test) の有用性を検討してみたいと考えた。TST を使用する理由としては、いわゆる自由記述法とは異なるが反応に加えられる制約は緩やかで反応の自由度は高く実施が簡便であるためである。TST においては、協力者自身が注目している側面についての記述は当然多くなることが予想される。このことから質的な側面からだけでなく量的な側面からも協力者自身がどのような領域に関心を持っているかを分析できると考えられる。上記のことをふまえ、本研究の目的は、(1) 個人が特に注目している自己の領域、個人自らが持っていると思っている特性・関心 (量的な側面) に加えて、(2) その特性を持つことへの評価や態度など (質的な側面) について、個性記述的な TST のデータから量的・質的な分析を行うことである。

II 手続き

1 調査時期

2002 年 6 月

2 協力者

都内近郊の大学に通う大学生 5 名（プロフィールは、Table1 参照）

Table1 各協力者のプロフィール

協力者	A	B	C	D	E
年 齢	19	18	19	18	18
性 別	男	女	女	女	男
自己評価尺度得点	26	30	30	26	31

3 手続き

5 名の協力者に対して、Rosenberg (1965) の自己評価尺度の回答用紙とともに TST の回答用紙を配布し、自宅等で回答してもらい後日回収するという形式をとった。その際、なるべく 20 個全部を埋めるように教示した。回答形態は、「わたしは」に続けて 20 の文を完成することを求めるものである。各々の反応に与えられたスペースは 1 行であった。

4 分析方法

目的で述べたように TST の特徴は非常に有用なデータを得ることができる反面、その分析方法にはいくつかの困難がある。1 つめとして、TST 回答用紙に記述された反応を字義どおり解釈するか、それとも記述の含意を読み取って解釈するかという問題である。2 つめとしては、TST 反応文のカテゴリー化に関する問題である。これらの問題が生じる要因の 1 つに TST 反応の標準的な分析方法や解釈の基準がないことがあげられる。そのため、分析には直観と多くの推測が要され、データの比較可能性や信頼性といった点に弱点がある。そこで本研究では、TST の反応文をカテゴリー化する際に田辺・正保 (1997) の手続きを参考にして分類を行った。田辺・正保は、従来の TST 研究を概観した上で、TST の標準的な解釈枠組みの作成を試み、自己評価との関連性からその妥当性を確かめている。この手続きを使用するのは、本研究の重要な視点の 1 つである自己評価を取り入れて作成された手続きであることと、カテゴリー数が少なく、大まかではあるが全体像を捉えやすいと考えられるためである。田辺・正保 (1997) の TST 反応分類カテゴリーとその分類基準は 9 つのカテゴリーからなっているが、彼らの調査の結果、ほとんどが

4・5つのカテゴリーで分類できることが示されており、本研究においてもその5つのカテゴリーを使用することにした。(カテゴリーの詳細は Table2 に示す)

Table2 TST 反応分類カテゴリーと分類基準 (田辺・正保 (1997) を引用・一部省略)

反応カテゴリー	概念規定	典型的記述内容の例・分類基準
C (consensual statements)	自己の社会的地位やラベリング、公共性のある社会的な関係性や所属集団などによって自己を規定するもの	所属・住所・年齢・職業・生年月日・家族構成・出生順位・出身・居住形態・家業・資格・国籍・氏名など 一般的な自己紹介のレパートリー
P (physical references)	身体的な特徴への言及	容姿・体格・視力・体力・髪型・健康・体質など
S (self-evaluative descriptions)	自己の特徴の評価・記述 自己を対象的に記述・評価しているもの	性格特徴・能力・社会的技能・行動特性など (例：よく○○といわれる等)
O (objective concerns)	対象への関心・興味・欲求 外的な事物への指向性により自己を規定するもの	好き・嫌い・欲しい・その他対象への指向性の言及 (例：××にはまっています等)
W (will expressions)	積極的・主体的な欲求・意志の表明・自己の変化への指向性と主体的な対象への関与の意志	将来の目標・希望・意志を伴う予定・欲求など

III 結果

1 個人が特に注目している自己の領域 (量的な側面からの検討)

協力者自身が注目している側面についての記述がその他の側面に比べて多くなるのは当然である。ここでは、協力者の全 TST 反応文における各カテゴリーの反応文の割合を見ることで関心の高い側面を量的な側面から検討する。各協力者の総分類数は、A (19)、B (21)、C (20)、D (25)、E (21) であった。Figure1 は、協力者別の全反応文における各カテゴリーの割合を示したものである。

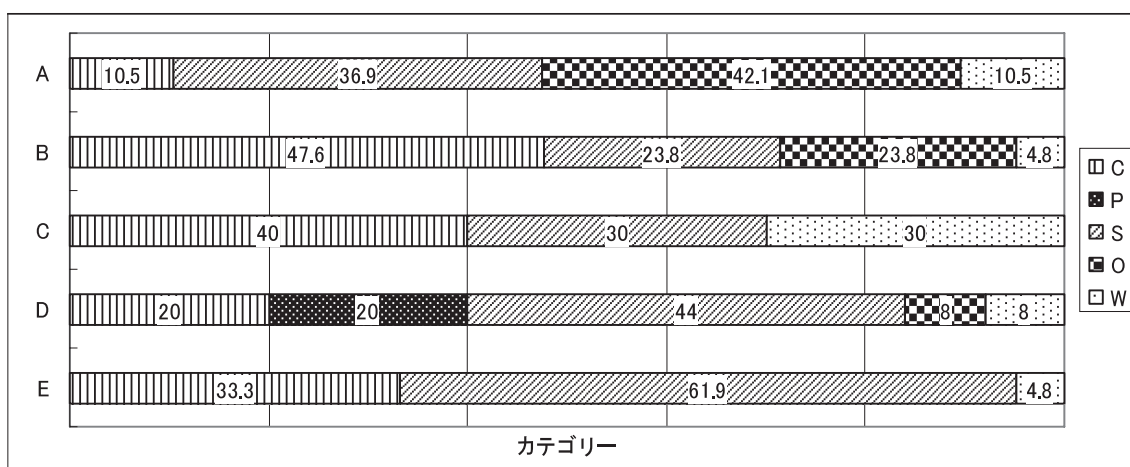


Figure1 各協力者別の全反応文における各カテゴリーの割合 (%)

- 1) **A について**：A は最も「O」への記述が多く、他の協力者と比べてみても割合が高い。次いで「S」への記述が多かった。このことから、A は外的な事物への指向性と自己の特徴への評価の面から自己を捉えている傾向が高い。
- 2) **B について**：B は「C」への記述が全体の約半分を占めており次いで「S」・「O」という割合になっている。この結果から、B は自己の社会的な関係性や所属集団（C）や自己の特徴への評価といったものによって自己を規定している傾向が強い。
- 3) **C について**：C は「C」・「S」・「W」の3つのカテゴリーに対する記述がほぼ同程度であり、社会的な関係性や自己の特徴への評価、自己の主体的な欲求・意志といったもの、つまり自分自身へと関心が向いていることが示された。また、「O」への記述がないことから外的な事物への指向性は低いといえる。
- 4) **D について**：D は「S」への記述の割合が約半分を占めており、さらに特徴的なのがこの5人の協力者の中で唯一「P」、つまり自己の身体的な特徴について記述していることである。また、D は5つ全てのカテゴリーに対する記述が見られた。
- 5) **E について**：E は「S」への記述が全体の6割以上を占めており、ついで「C」となっている。E も C と同様に「O」への記述がないことから外的な対象への関心は低く、「S」の割合が高いことから自分の特徴への評価、社会的な関係性や所属集団など自分自身へと関心が向いている傾向が強いといえる。

2 その特性を持つことへの評価や態度について（質的な側面からの検討）

2 では、TST 反応文に対する質的な側面からの分析を行った。山田（1989）は従来の TST 分析は TST 記述内容を構成している要素的諸事項を手掛かりとしたカテゴリー分析が大半を占めており、TST の具体的な内容の分析には十分な注意が払われていないことを指摘している。山田の指摘にあるようにここでは TST の反応文から協力者の大まかな特徴を見ていくこととする。Table3 に各協力者の記述例を挙げておく。

Table3 各協力者の TST 記述例

協力者	記 述 例
A	茶道会の幹事長です / お茶が好きです / 部長としては頼りないと言われます
B	テニスサークルに入っています / テニスが好きです / 懐石料理屋でバイトをしています
C	文武両道させたいです / スポーツが大好きです / 英会話をうまくしたいです
D	背が低いです / 髪が短いです / よく浪人したと思われま
E	明るい性格です / 楽道家です / 頼まれるとけっこうはりきるタイプです

- 1) **A について**：A は、Table3 にあるように、サークルを中心とした記述が目立った。直接サークルに関する記述がなくても、“お茶が好きです”などに代表されるようにサー

クルと何かしら関連のある内容を記述していることから、Aにとってサークルが大きな位置を占めていることが示された。

- 2) Bについて：BもAと同様にサークル関連の記述が多かったが、サークルだけでなくBはある団体・集団などに所属していることに関する記述が目立った。
- 3) Cについて：Cは“～したい”とか“～なりたい”といった記述や〇〇が好きですというような内容の記述が多く、今自分が持っている欲求や希望、意志など、つまり今の自分（または将来の自分）に関心が向いていることが示された。
- 4) Dについて：Dは身体的な特徴や他者から自分がどのようにみられているかに関する記述が多く、自分だけでなく他者からも観察可能な側面（背が低い等）や他者から捉えられている自己への諸側面への注目が高いことが示唆された。特に、Dは自己の否定的な側面を記述する傾向がみられた。
- 5) Eについて：Eは自分の内面的な特性（性格など）に言及する記述が多く、他者、または外的な事柄に関する記述は、ほとんどみられなかった。このようなTSTの記述内容からEは自己の内面への関心が高いことが示された。

IV 考察

本研究の協力者がどの程度の自己評価をもっているのかを測定した。その結果、本研究における5名の協力者のうち、A・Dは中程度（平均的な）の自己評価者であり、残りのB・C・Eは高自己評価者であった。以下では、自己評価と各協力者の結果について考察をすすめていくこととする。

1 A・Dの場合（中自己評価者）

TSTで、どのような側面に注目・価値を置いているのかを調べた結果、Aは、「サークル」と自己の特性を関連付けて記述する傾向がみられた。これは、TSTを用いて発達的な変化を調査した山田（1989）の「大学生において、特に社会的事物との関わりを自己の特性との関連を示しながら記述する」という知見と一致している。このことから、Aは外的な事物（サークル）と自己の特性の関わりという側面に注目しているといえよう。また、Dは自己の様々な側面に対する受容性が高いという傾向が示された。これは、田辺・正保（1997）の知見から、自己の身体的な特徴に関する記述があるものは自己受容度が高いという結果によるものである。このことと一致するように、Dは5つ全てのカテゴリーへの記述があった。さらに、Dは自己の否定的な側面を多く記述する傾向がみられた。この傾向は、単に自己を否定的に捉えているのではなく、他者の視線・評価への懸念が強いことと関連があるといわれている（田辺・正保、1997）。このような側面につ

いては、自己評価との関連でさらに検討を深めていけると考えられる。

2 B・C・E の場合（高自己評価者）

B は、自分について記述する際に、社会的な関係性や所属集団との関わりにおいて自己の特性を示す傾向がみられた。この点は、山田（1989）の「大学生において社会的文脈との中性的な関わりを記述する傾向がみられる」という知見と一致する。また、C は自分自身へと関心が向いていることが示された。C は“～したい”とか“～になりたい”といった内容の記述が多く、これは、田辺・正保の知見から、自己の能力・評価の高さと関連があるといわれている。C は高自己評価者であるから、この結果は C の自己評価の高さと一致する。さらに、C が記述したような内容は、山田の調査においても大学生頃から多く記述される傾向があることが指摘されている。また、E も C と同様に、自分自身へと関心が向いている傾向がみられた。特に、E は自身の特徴・評価についての記述が多く、この傾向は、自己評価の高さと関連しているといわれている（田辺・正保、1997）。この知見による指摘は、E の自己評価の高さと一致している。また、内容的には、自分の内面的な特性（性格）に言及する傾向がみられたことから、E は自己の内面への関心が高いことが示されており、TST を用いることで、協力者の自分自身を評価づけたり、意味づける基準がどこにあるのかという点を捉えられる可能性があることが示唆された。

上記のような結果から、TST を用いることで、協力者がどのような側面に関心や注目を向けているか、どのような側面が本人の中で重要な位置を示しているかといったものがみえてくることが示された。本研究では、自己評価との関連だけでその有用性について予備的な検討を行ったが、今後はその他の尺度（例えば、私的自己意識や公的自己意識など）と組み合わせて検討を行うことや協力者の人数を増やし、カテゴリーの内容等の吟味などについてもさらに検討を加えることで、協力者自身の特性というものをより全体的に捉えられる 1 つの方法としてさらに整理を行っていきたいと考えている。

V 参考文献

- 福島 治 身近な対人関係における自己呈示：望ましい自己のイメージの呈示と自尊心及び対人不安の関係 社会心理学研究, 1996 12 120 - 32
- 福島 治 自己知識の多面性と対人関係 社会心理学研究 2003 18 2 67 - 77
- Goffman, E. the presentation of self in everyday life. Garden City, NY: Doubleday. 1959
- 池上知子・大塚友加里 自己スキーマの望ましさを相違が印象形成過程に及ぼす影響 社会心理学研究 1997 12 172 - 182
- 池田善英 不適切な自己呈示に対する反応 立教大学心理学研究 2001 43 1 - 9
- Khun, M.H., & McPartland, T.S. an empirical investigation of self-attitudes. American Sociological Review, 1954 19 68 - 76
- 久保真人 自己評価と自己呈示スタイルとの関係 社会心理学研究 1998 14 78 - 85.
- 栗林克匡 自己呈示：用語の区別と分類 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）

- 1995 42 107 - 114
小林知博 自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応 大阪大学研究年報 2001 35 - 43
- Markus, H. & Kitayama, S. Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review* 1991 98 224 - 253
- 溝上慎一 自己評価の規定要因と SELF - ESTEEM との関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係— 教育心理学研究 1997 45 62 - 70
- 水間玲子 自己研究における「価値」—その位置づけと検討意義について— 京都大学教育学部紀要 1998 44 192 - 204
- 正村俊之 秘密と恥—日本社会のコミュニケーション構造— 勁草書房 1995
- 岡本直子 親密な他者の存在と成功恐怖の関係について教育心理学研究 1999 47 199 - 208
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ.Press.
- 下斗米淳 対人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行のズレからの検討— 実験社会心理学研究 2000 40 1 1 - 15
- 柴橋祐子 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究 1998 31 1 19 - 26
- 柴橋祐子 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究 2001 12 2 123 - 134
- 酒井恵子 自己高揚的呈示の否定的側面に対する反応の個人差 心理学研究 1996 67 4 314 - 320
- 菅原健介 対人不安と社会的スキル 相川充・津村俊充（編） 社会的スキルと対人関係 誠信書房 998 112 - 128
- 田辺肇・正保晴彦 TST（20 答法）による自己観の把握—反応分類手続き作成と自己評価との関連による妥当性の検討— 教育相談研究 1997 35 57 - 66
- 浦 光博 対人関係の変化過程の検討 社会心理学研究 1990 5 2 110 - 121
- 渡部玲二郎 対人関係能力と対人欲求の関係 心理学研究 1999 70 2 154 - 159
- 山田ゆかり 青年期における自己概念の形成過程に関する研究— 20 答法での自己記述を手がかりとして— 心理学研究 1989 60 245 - 252